

2019年度卒業生アンケート 調査報告

1. 調査の目的

本調査は、ノートルダム清心女子大学における学修支援および生活支援の充実を図るための基礎データを収集することを目的として、卒業を控えた4年生を対象として実施するものである。2017年度、2018年度の調査では、大学生生活全般および本学の教育内容・支援制度等に対する満足度を問い、学生にとってどの点が充実しており、どの点が不十分と感じられているかを明らかにした。第3回目となる2019年度調査は、より詳細な実態把握のために満足度の質問項目を細分化するとともに、学生自身の各種活動への取り組みや本学の大学生生活を通じて身につけた力、ディプロマ・ポリシーの到達度など学修成果を測定するための質問項目を新たに追加し、調査票の全面的な改訂をおこなっている。またこの改訂では、エンrollment・マネジメントの観点からの分析にも対応できるよう、入学時に実施するアンケートとの質問項目の統一を図っており、学生一人ひとりの在学中の成長過程を追跡的に把握することが可能となった。

本調査は、回答者である卒業生たちにとっては4年間の学生生活の振り返りの機会でもある。彼女たちの回答から、本学で学生生活を送ることの意義をわれわれ自身が再確認すること、そして、学生一人ひとりの実態に応じたより具体的な支援の提案につなげることが、われわれに託された課題であるといえよう。

2. 調査の概要

本学では3月を、4年生が大学で過ごした4年間の振り返る時期と位置づけており、4年生が卒業への準備を始める日として、毎年3月3日に「ノートルダムデー」を実施している。ノートルダムデーは本学の伝統的な行事の一つであり、4年生全員の出席を義務づけていること、また、学生一人ひとりに4年間の振り返ってもらうことを趣旨とした行事であることから、本調査は2017年度から、ノートルダムデーに出席した4年生に調査票を配付し、その場で回答してもらうという形で実施してきた。

ただし2019年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、3月の大学行事が全面的に中止となったため、上述の集合調査の方法で実施することができなくなった。そこで、卒業証書・学位記授与日として設けられた3月13日（金）・14日（土）に、調査票を入れた封筒をゼミ担当教員が手渡しする方法で配付した。回収は、学内の4か所に設置した回収箱に入れる方法と郵送の2つの方法を併用した。回収箱は3月13日（金）から3月31日（火）まで設置し、郵送による回答の締め切り日も3月31日（火）としている。

ゼミ単位で配付した封筒には、調査票のほか、調査の趣旨を説明する依頼状、返送用封筒と、「ノートルダム清心女子大学を卒業するにあたって」という自由記述式の二枚複写式「振り返りシート」を同封している。この振り返りシートは、例年ならばノートルダムデーの時間に自らの大学生生活を振り返りつつ記入してもらい、その場で回収されるものであるが、今回は調査票と

もに回収箱または郵送の方法で提出してもらった。この振り返りシートに記述された内容も、本報告では補助的なデータとして使用する。

3. 調査主体

本調査は、IRセンターが主体となって実施するものである。

4. 調査対象

2019年度卒業生を対象とする。ただし、調査票を配付したのは、2019年度卒業証書・学位記授与日に出勤した学生である。

5. 調査実施日

2020年3月13日（金）・14日（土）に調査票を配付した。回収締切日は3月31日（火）である。

6. 調査方法

卒業証書・学位記授与日に出勤した学生にゼミ担当教員が手渡しで配付し、学内で回答後に4か所に設置した回収箱に投函または郵送による方法で回収した。なお、本調査と併せて自由記述式の「振り返りシート」も、二枚複写式の記入用紙のうち1枚を提出してもらっている。

7. 調査内容

学籍番号を記入する欄を設けており、無記名ながら実質的に記名式の調査となっている。

主な質問項目は、入学時の本学志望順位、学修活動・課外活動・進路選択における活動への取り組みの積極度、本学のキャンパスの環境および各種支援に対する満足度、友人・教員・職員との関わりに対する満足度、大学生活を通じて身につけた力、入学時に抱いていた期待の充足度や本学で学んだことへの評価、ディプロマ・ポリシーの到達度である。本学志望順位を除くすべての質問が、6件法による選択肢から1つを選んで回答する形式である。最後に「卒業生としてこれからのノートルダム清心女子大学に期待すること」を自由に記述してもらう欄を設けている。

8. 回収結果

回収箱および郵送によるアンケートの回収数は178名であり、全在籍者数に占める有効回収率は30.7%である。新型コロナウイルス感染症の感染拡大が進行する時期にあった2019年度調査は、感染防止対策の徹底により、前例をみない特殊な状況下での実施となった。例年のように集合調査を実施することができず、学生の自発的意思に委ねるほかない回収方法となったため、過去2年間の回収数および有効回収率には及ばない結果となっている¹⁾。感染拡大の行方が見通せない不安定な時期にありながらも、アンケートに協力してくださった学生のみなさんには深く感謝申し上げる。少数ではあってもこれらの回答も、本学の改善ならびに今後の取り組みに活用するための貴重な資産として蓄積されていくこととなる。

1) 2017年度は319名（有効回収率57.0%）、2018年度は360名（同63.9%）である。

表 1 は、学科別の回答者数および有効回収率である。学科間の回収率の差が大きいため、以下の分析においては、学科別の比較よりも全体的な傾向を把握することを主眼としたい。また、今回のデータには何らかのバイアスがかかっている可能性があることにも留意しなければならないであろう。結果の扱いには例年以上に慎重であらねばならぬことを心にとどめつつ、貴重な回答を最大限に活かせるよう分析を試みる。

表 1 学科別回答者数および有効回収率

	英語英文 学科	日本語日 本文学科	現代社会 学科	人間生活 学科	児童学科	食品栄養 学科	全体
在籍者数	107	77	68	88	148	91	579
回答者数	18	20	29	50	42	19	178
有効回収率	16.8%	26.0%	42.6%	56.8%	28.4%	20.9%	30.7%

(在籍者数は2020年3月1日現在)

9. 調査結果

(1) 学修活動・課外活動・進路選択における活動への取り組み

本学卒業生たちは学生生活全体を振り返る中で、どのような活動に積極的に取り組んできたと感じているのだろうか。以下の図 1～図 3 は、学修活動、課外活動、進路選択における活動にそれぞれの程度積極的に取り組んだかを尋ねた結果を示したものである。各項目とも「まったく積極的でない」(1点)から「とても積極的」(6点)までの6件法で回答されている。

学修活動については、「海外留学」を除いて、いずれの授業科目でも多くの学生が積極的に取り組んだと感じていることがわかる。特に「卒業論文」「ゼミ形式の学科専門科目や個別研究指導」において積極性の高さがみられる。卒業論文は、完成までに要する時間や注ぎ込んだ労力が回答に反映されているともいえるが、関心を持つテーマを自ら選んで取り組むことが自発的な勉学意欲や積極性につながっていると推測できる。その他、「講義形式の学科専門科目」や「免許・資格関連科目」など専門性の高い科目で、積極度が高い傾向があることがわかる。

一方で、「キリスト教科目」「教養科目」「自立力育成科目」「外国語科目」といった全学共通科目の積極度は、相対的に低い。これらの科目は、比較的低年次で履修されること、また自身の専門と直接には関連しない内容であることが、学生の意識の中では専門科目をより高く位置づける結果となっているのであろう。もちろん、科目への興味関心からではなく卒業要件を充足させるために履修するケースが少なからずあることも、全学共通科目への積極度が低い要因であることは疑いない。しかしながら、リベラルアーツカレッジであることを教育理念とする本学において、教養と専門は学修の両輪をなすものである。今後、新設が予定されているリベラル・アーツ教育センター(仮称)には、これらの科目に対する学生の積極性を促す役割が期待される。また本調査においても、全学共通科目、とりわけキリスト教科目への取り組み度が相対的に低くなる理由をより詳細に分析するとともに、学生たちにとって、キリスト教科目をはじめとする全学共通科目を受講することが専門科目とは異なるどのような魅力や成果として感じられているのかという観点から、本学学生の学修活動を総合的に評価する試みが必要となると思われる。

図1 学修活動への積極的取り組みの程度

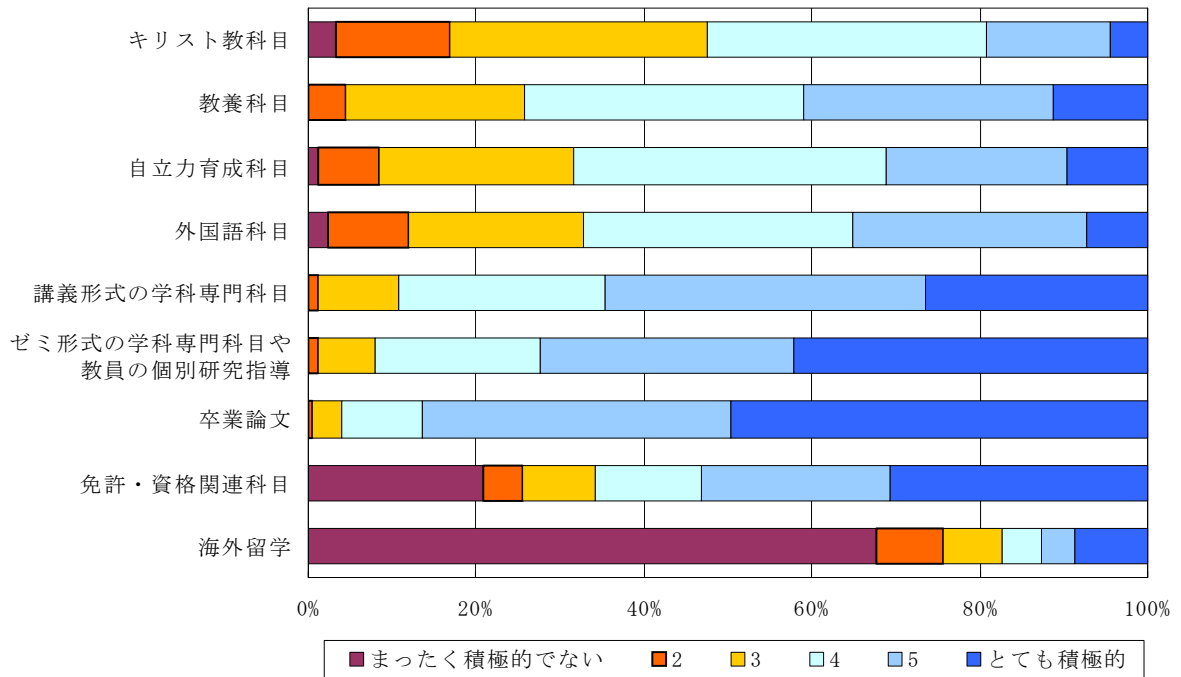


図2の課外活動の6項目の中では、「アルバイト」への積極的取り組みが突出している。全体の8割を超える学生が「積極的」であることを示す4~6点の回答をしている。本学学生に限らず、アルバイトをすることは現代の学生生活の一部となっているといっても過言ではない。ただし、その目的や事情が一樣ではないことには留意しなければならないだろう。本学は自宅から通学する学生が多く、時間的余裕を活かして積極的に取り組める環境にあることが考えられる一方で、本学学生の約半数が奨学金を利用していることから、家庭の経済的事情によりアルバイトに積極的に取り組まざるをえない場合があることも想定される。今後の調査では、近年の本学学生を取り巻く環境を踏まえ、アルバイトの実態を把握することも必要となろう。その結果を、学生にとってより効果的な奨学金制度の検討につなげたい。

課外活動全般の傾向としては、学修活動に比べると、積極的取り組みの程度は低い。積極的に取り組んだ学生とあまり積極的ではなかった学生とに二分化されるという結果となった。

図2 課外活動への積極的取り組みの程度

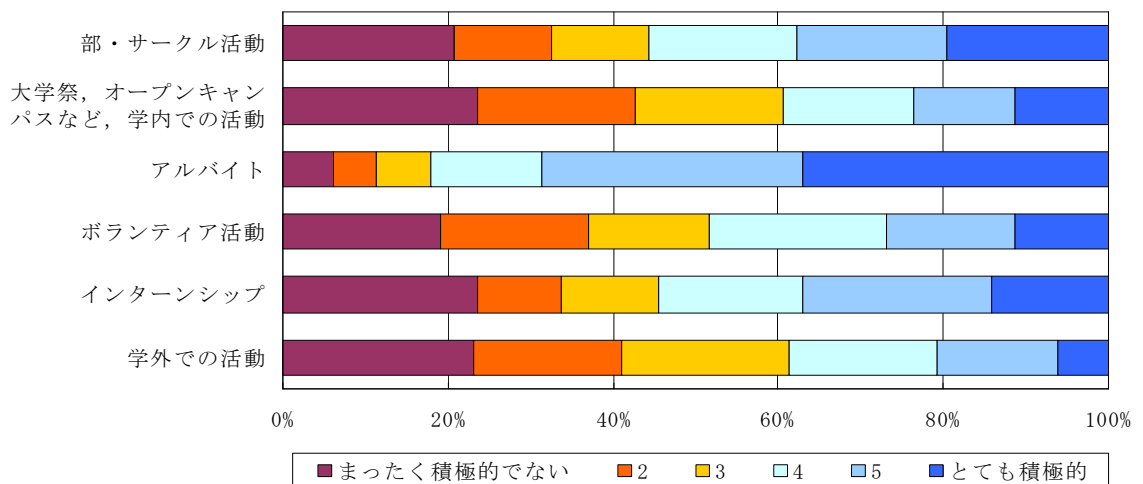
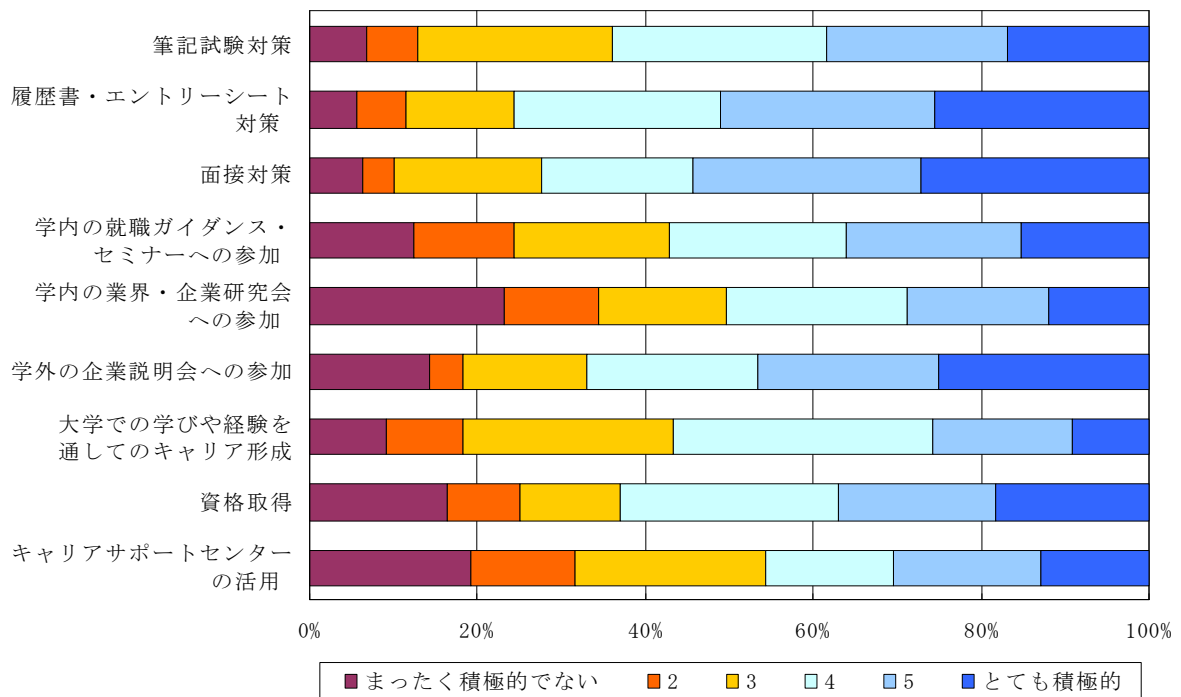


図3の進路（就職・進学等）選択における活動においては、「筆記試験対策」「履歴書・エントリーシート対策」「面接対策」「学外の業界・企業研究会への参加」「資格取得」の項目で6割以上が「積極的」に取り組んだと回答している。図2の「インターンシップ」にも半数以上の学生が積極的に取り組んだとしているが、筆記試験や履歴書・エントリーシート、面接への対策は、学生たちが3年次から本格的に参加するインターンシップのエントリーおよび企業側の選考過程で必須であり、就職活動全体における各選考結果に直結する活動である。進路選択という人生の岐路に直面して、学生たちは初めて真剣に自己と向き合い、自己PRや志望理由を考え、それを文章化する作業を経験する。そのために費やされた多くの時間と努力が、積極的に取り組んだという実感を伴って振り返られているのだと考えられる。学内外で開催されるセミナーや説明会等への参加活動については、情報収集や人脈構築を通じて成果や成長を感じることができた層と、受動的な気持ちで参加した層とで回答が割れたように見受けられる。また、「大学での学びや経験を通してのキャリア形成」も6割近くが積極的に取り組んだと回答しているが、この項目に関しては、積極度ではなく、4年間を振り返っての充足度を問うべきであったかもしれない。

「キャリアサポートセンターの活用」の積極度が他の項目と比べて低いのが、この数値は学生たちのセンターへの不満の表れやキャリアサポートセンター離れをただちに意味するものではないだろう。後述するようにキャリアサポートセンター職員への満足度は高く、年間の面談件数は延べ3,000件を超えている。また、図3に挙げた最初の5項目はキャリアサポートセンターが主催する活動でもある。回答する学生たちにとって、センターの「活用」が、自らが積極的に取り組んだ「活動」としてはとらえにくかったのではないかと思われる。

図3 進路選択における活動への積極的取り組みの程度



ここまで、学修活動、課外活動、進路選択活動の積極的取り組みの程度の分布を、項目ごとに個別にみてきたが、これらの活動の相互の関連はどのようになっているのだろうか。まず、3活動

とも活動内の項目間の相関は高い。例えば、学修活動のある活動項目に積極的に取り組んだと回答した者は、学修活動の別の活動項目にも積極的に取り組んだと回答する傾向があるということである。課外活動と進路選択活動についても同様である。各活動内の項目間の相関が高いため、図1～図3に掲げた学修活動9項目、課外活動6項目、進路選択活動9項目の得点をそれぞれ合計して取り組み度の総計とし、学修活動得点、課外活動得点、進路選択活動得点を算出した。活動項目はすべて6件法で回答されており、1～6点に得点化される。したがって、学修活動得点は9～54点、課外活動得点は6～36点、進路選択活動得点は9～54点の範囲をとる。次の表2は、3つの活動の取り組み度得点の相互の相関を示したものである。3つの活動への積極度は相互に相関していることがわかる。また表3は、3つの活動の取り組み度得点と、学修・課外・進路選択の個別の活動との相関係数を算出した結果である。

表2 学修活動得点・課外活動得点・進路選択活動得点の相関行列

	学修活動	課外活動	進路選択活動
学修活動得点	1.000	0.355**	0.215**
課外活動得点	0.355**	1.000	0.484**
進路選択活動得点	0.215**	0.484**	1.000

* p<.05 ** p<.01

表3 学修活動・課外活動・進路選択活動の各項目と取り組み度得点との相関

		学修活動 得点	課外活動 得点	進路選択 活動得点
学 修 活 動	キリスト教科目	—	0.242**	0.103
	教養科目	—	0.276**	0.226**
	自立力育成科目	—	0.352**	0.161*
	外国語科目	—	0.216**	0.137
	講義形式の学科専門科目	—	0.226**	0.218**
	ゼミ形式の学科専門科目や教員の個別研究指導	—	0.214**	0.129
	卒業論文	—	0.179*	0.104
	免許・資格関連科目	—	0.068	0.008
	海外留学	—	0.144	0.095
課 外 活 動	部・サークル活動	0.095	—	0.066
	大学祭、オープンキャンパスなど、学内での活動	0.220**	—	0.143
	アルバイト	0.157*	—	0.409**
	ボランティア活動	0.457**	—	0.163*
	インターンシップ	0.053	—	0.493**
	学外での活動	0.217**	—	0.345**
進 路 選 択 に お け る 活 動	筆記試験対策	0.093	0.285**	—
	履歴書・エントリーシート対策	0.205**	0.394**	—
	面接対策	0.160*	0.349**	—
	学内の就職ガイダンス・セミナーへの参加	0.170*	0.396**	—
	学内の業界・企業研究会への参加	0.054	0.338**	—
	学外の企業説明会への参加	0.023	0.228**	—
	大学での学びや経験を通してのキャリア形成	0.370**	0.447**	—
	資格取得	0.274**	0.205**	—
	キャリアサポートセンターの活用	0.054	0.293**	—

* p<.05 ** p<.01

註) 相関係数がr=0.2以上の数値を太字にしている。以下の相関係数の表についても同様である。なお、取り組み度得点の算出に用いた項目と取り組み度得点との相関係数の欄は—で示した。

表3からも、学修活動・課外活動・進路選択活動を個別にみても、多くの項目でこれら3領域の活動への取り組みの積極度は相互に相関していることがわかる。すなわち、積極的な取り組みをみせる学生は特定の領域の活動のみに注力するのではなく、満遍なく全般的に頑張っているということである。とりわけ課外活動に積極的に取り組んだ学生は、学修活動や進路選択活動においても積極的に取り組んだという感触をもって卒業に臨んでいるといえる。

このような多方面にわたる活動への取り組み方は、本学で学ぶことを望んで入学した学生のほうが、そうでない学生よりも意欲的であり積極的であることが予想される。では、入学時の状況の違いは積極度に影響を及ぼしているであろうか。入学時の本学の志望順位別、本学に入学した入試形態別に、各活動の取り組み度得点を比較したものが表4および表5である。表中の数値は志望順位、入試形態ごとの各活動得点の平均値であり、得点が高いほど積極的に取り組んだことを意味する。

表4 本学入学時の本学の志望順位別にみた各活動の取り組み度得点の平均

	第一志望		第二志望		第三志望以下		全 体		有意 確率
	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	
学修活動得点	36.40	(98)	37.42	(52)	36.65	(17)	36.74	(167)	0.578
課外活動得点	21.07	(103)	21.18	(55)	21.42	(19)	21.14	(177)	0.966
進路選択活動得点	33.29	(100)	36.83	(54)	35.44	(18)	34.63	(172)	0.068

表5 本学に入学した入試形態別にみた各活動の取り組み度得点の平均

	一般前期	一般後期	センター利用	姉妹校・カトリック校推薦	公募制推薦	指定校推薦	全 体	有意 確率
	平均 度数	平均 度数	平均 度数	平均 度数	平均 度数	平均 度数	平均 度数	
学修活動得点	35.45 (47)	36.25 (12)	40.29 (7)	37.22 (9)	36.73 (30)	37.18 (62)	36.68 (167)	0.333
課外活動得点	20.04 (51)	23.42 (12)	22.50 (8)	20.89 (9)	20.87 (31)	21.70 (66)	21.19 (177)	0.385
進路選択活動得点	33.60 (50)	40.25 (12)	39.71 (7)	29.56 (9)	34.61 (31)	34.43 (63)	34.59 (172)	0.071

本学入学時の志望順位別の比較では、学修活動得点および課外活動得点には差はみられない。すなわち、どの志望順位で入学したかということで、入学後の学生の積極度に差が出るわけではない。低い志望順位であった学生も、第一志望で入学した学生と同様の積極性をもって学修活動や課外活動に励んだといえる。また進路選択活動得点は、第一志望で入学した学生よりも、第二志望以下で入学した学生のほうがむしろ高い。心から望んだ入学ではなかったかもしれないが、入学後も学業や課外活動への意欲を失うことなく本学で4年間を過ごし、卒業後の進路選択についても熱心に取り組んできた様子が想像される。

また、振り返りシートに記述された内容からも、低い志望順位で入学したいいわゆる不本意入学の学生が、入学後の講義における理事長の言葉や、教員、友人らとの関わりを励みとして、自主性や意欲を向上させていることがうかがえた。入学後の早い段階における学生への積極的な働きかけが、現状へのマイナス思考や減退した意欲をプラスに転じさせ、腐ることなく勉学や諸活動に取り組むための助力となっている。このような形の濃やかなサポートは、本学が誇るべき伝統の一つである。

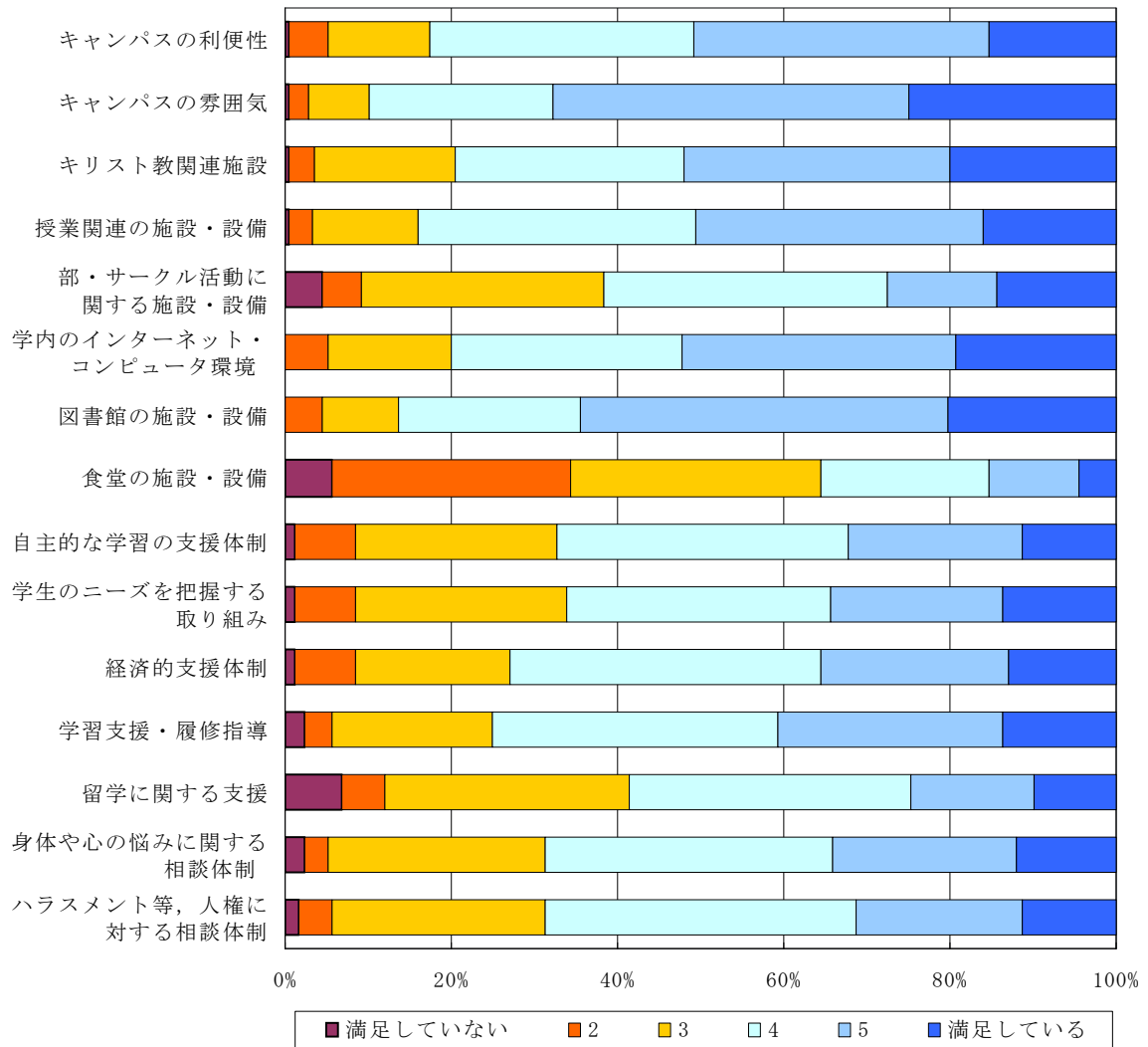
志望順位と大きく関連するのが入試形態である。しかし表5からは、特定の入試形態に顕著な

特徴はみられず、表4と同様に、進路選択活動において合格時期が遅い「一般後期」「センター利用」での入学者の積極性が高いことが見出されるのみである。総じて学力が高く、おそらく本学が「本命」ではなかった層が、卒業時には各領域の活動に「積極的に取り組んだ」と感じて巣立ってゆくことにわれわれは感謝せねばならない。いかなる形で入学しても、在学中の諸活動を通して学生たちが有意義な経験をし、卒業時に「清心で学べてよかった」と思ってもらえることに勝る喜びはないといえる。

(2) キャンパス環境と各種支援の評価

本学のキャンパスの環境および各種支援の評価項目として図4に示した15項目を挙げ、それぞれについて「満足していない」(1点)から「満足している(6点)までの6件法で回答してもらった。図の上部の8項目が環境や設備に関する項目、下部の7項目が支援体制や制度に関する項目である。

図4 キャンパスの環境や各種支援に対する満足度



キャンパスの雰囲気や利便性をはじめとする本学の施設・設備に対しては、多くの学生が満足を示している。最も満足度の高い項目「キャンパスの雰囲気」については、振り返りシートの記

述にある「清潔さ」や「トイレの改修」「四季折々の花や景色」といった物理的な理由と、友人たちと4年の年月を過ごす中での居心地のよさなど感覚的な理由とが総合されていると考えられる。「図書館の施設・設備」への評価も高く、在学中に開設されたラーニングcommonsや、2階のグループ学習室の増設、ノートパソコンの貸出サービス等の取り組みが、満足度につながったといえるだろう。

他方、「食堂の施設・設備」に満足していないことが、数値として顕著に表れている。学生食堂は、今回の調査に回答した学生が卒業した後の2020年6月にリニューアルオープンし、施設・メニューとも一新している。コロナ禍による遠隔授業導入等の影響で、オープン後の現在も規模を縮小した営業が続いており、まだ学生食堂を評価できる段階ではないが、本格再開後には利用状況や満足度を経年で確認していきたい。また、「部・サークル活動に関する施設・設備」の満足度も高いとはいえないが、「満足していない」という回答の中には、後述するように、部やサークルに加入していない学生の使用経験がないゆえの「満足のなさ」が含まれている可能性がある。今後の調査では、回答者を加入者のみに限定する等の調査設計上の工夫をしたうえで、改めて問い直してみたい。

本学の支援体制や制度面に対して「満足」している比率は、各項目とも6~7割程度におさまっている。支援・制度は、実際にその支援を受けなければ評価することが難しい。7項目の中で「学習支援・履修指導」「経済的支援体制」の満足度が相対的に高いのも、学科やアドバイザーの履修指導や、奨学金等の支援を受けた経験に基づいているからなのであろう。その意味で、「留学に関する支援」「身体や心の悩みに対する相談体制」「ハラスメント等、人権に対する相談体制」に対して、実際に支援・サポートを受けたと思われる人数を上回る比率で「満足」の回答がなされていることは、自分自身が支援を受けていなくても、本学にそのような支援体制があることの認知と、支援内容を理解したうえでの「満足」ととらえることもできる。

学生生活の取り組み度との関連についてもみてみよう。表6は学修活動・課外活動・進路選択活動得点と、キャンパス環境や各種支援に対する満足度との相関係数を示したものである。

学修活動に積極的に取り組んだ学生は、キャンパスの環境や各種支援に対する満足度が総じて高い。大学によく足を運び、図書館やOPIT教室をよく利用し、さまざまな支援についての情報もキャッチして必要に応じた利用ができているのであろう。また、課外活動に積極的に取り組んだ学生は、部・サークル活動に関する施設・設備への満足度が高い。この項目の満足度が相対的に低いことを上で述べたが、実際に部活動・サークル活動をしている学生たちにとっては、施設・設備は満足できるものとして評価されているようである。

進路選択活動への積極的取り組み度とキャンパス環境や各種支援の満足度との相関はあまりみられなかった。また、学生食堂のみはいずれの取り組みの積極性とも相関していない。

勉学に積極的に取り組もうとする学生にとって、本学のキャンパスの雰囲気や施設、さまざまな支援体制は、「勉学をサポートしてくれるもの」として受け止められているからこそ、学修活動得点との相関が高いのであろう。そして、本学の施設や支援体制は万全であるとはいえないにしても、それを必要とする学生にとってある程度は機能しているといつてよい。逆に、施設や制度をより使い勝手のよいものにしていくことで、学修活動への取り組みにあまり積極的でない学生の積極度を高める効果も期待できよう。

表6 キャンパス環境・各種支援に対する満足度と各活動の取り組み度得点との相関

	学修活動 得点	課外活動 得点	進路選択 活動得点
キャンパスの利便性	0.362**	0.091	0.088
キャンパスの雰囲気	0.313**	0.110	0.020
キリスト教関連施設	0.334**	0.155*	0.114
授業関連の施設・設備	0.343**	0.146	0.146
部・サークル活動に関する施設・設備	0.199*	0.264**	0.113
学内のインターネット・コンピュータ環境	0.331**	0.230**	0.166*
図書館の施設・設備	0.287**	0.172*	0.133
食堂の施設・設備	0.084	0.169*	0.074
自主的な学習の支援体制	0.271**	0.200**	0.109
学生のニーズを把握する取り組み	0.259**	0.134	0.025
経済的支援体制	0.247**	0.197**	0.080
学習支援・履修指導	0.234**	0.067	-0.067
留学に関する支援	0.299**	0.086	-0.029
就職・進路に関する支援	0.420**	0.161*	0.171*
身体や心の悩みに関する相談体制	0.335**	0.119	0.098
ハラスメント等、人権に対する相談体制	0.354**	0.094	0.101

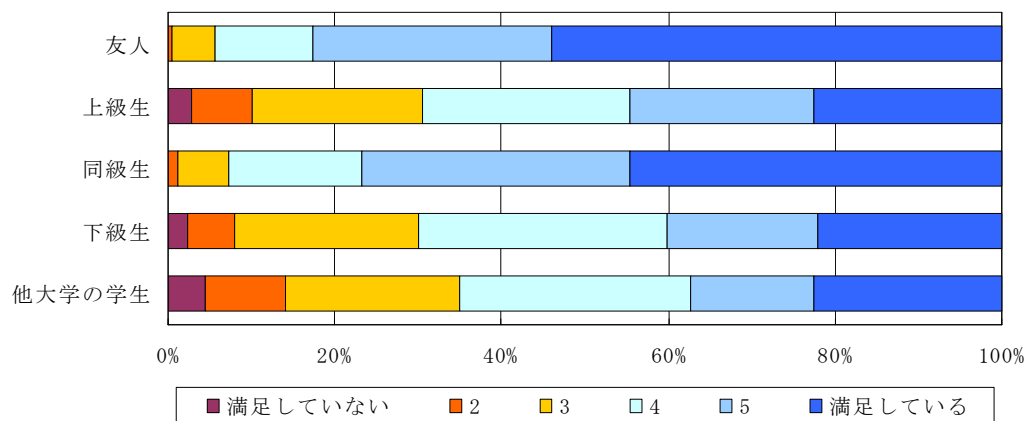
* p<.05 ** p<.01

(3) 友人・教員・職員との関わりの満足度

大学生活は一人だけで成り立つものではない。学友との切磋琢磨や楽しい語らい、尊敬できる師との出会い、職員の親身なサポートなど、充実した大学生活の基盤をなすのはさまざまな人間関係である。図5～図7に示すのは、友人、教員、職員との関わりの満足度である。これらの項目も「満足していない」(1点)から「満足している(6点)までの6件法で回答されている。

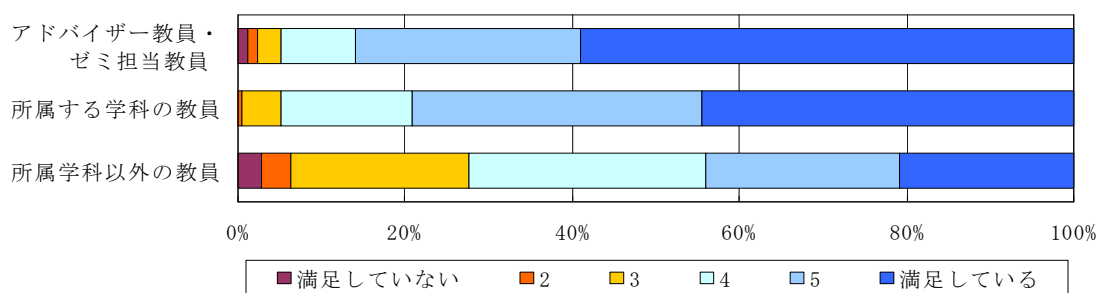
図5の「友人」は、その定義をあえてしないまま尋ねているが、「友人」「同級生」との関係に多くの学生が満足している。同じ授業を受講したり、ゼミで長い時間をともにするなど、同学年どうしでの「横」のつながりは比較的容易に構築されていることがうかがえる。「上級生」「下級生」といった「縦」の関係、さらには大学を超えた関係の満足度は相対的に低い。対面で会ったり連絡を取り合ったりする頻度が高いほど、関係性の満足度も高くなると考えるならば、この結果は必然ともいえる。

図5 人間関係の満足度(友人等との関わり)



同様に、教員との関わりについても接する機会の多さ、関係の深さが、満足度に反映されているといえる。特に「アドバイザー教員・ゼミ担当教員」は、勉学や研究上の指導はもちろん、学生の個人的な悩みや家庭の事情に踏み込んだ相談に応じる機会もあり、それらの対応に学生たちはおおむね満足できているということなのであろう。また、所属学科教員と比べて接触の頻度が低い他学科の教員に対しても、学生の満足度は低くはない。教員一人ひとりに対する個別の評価はまた別にあるのかもしれないが、「教員」という括りとしては、本学教員との関わりに本学学生の多くは満足しているといえるのではないだろうか。

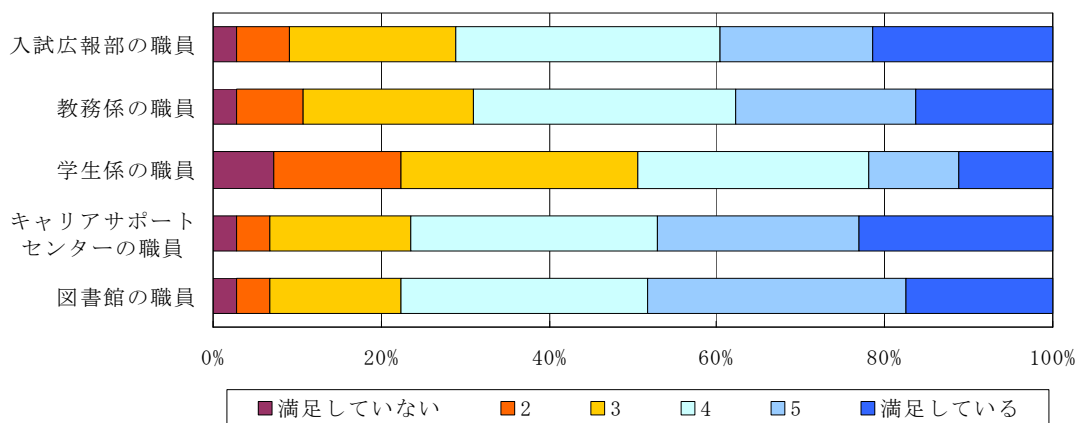
図6 人間関係の満足度（教員との関わり）



職員と学生との関わり方は、友人関係や教員との関係とは大きく異なる。証明書や学割を発行してもらいたい、求人情報を閲覧したい、希望する書籍を図書館に入れてほしいなど、目的や要望があるときに学生は職員と関わることになる。もちろん、何度も利用する中で顔を覚えてもらい、親しく会話をする関係になる場合もあるが、基本的には学生と職員との関わりはその場限りの一時的なものである。したがって、各部署の業務内容が学生の満足度に大きく影響していることが考えられる。

図7をみると、本学職員に対する学生の満足度は概して高いといえるが、中でも「キャリアサポートセンターの職員」「図書館の職員」に対しては全体の8割近くが「満足」と回答している。両部署に共通するのは、学生の利用目的が明確であり、期待したサービスが受けられることであろう。

図7 人間関係の満足度（職員との関わり）



例えばキャリアサポートセンターでは、履歴書やエントリーシートの書き方についてアドバイスを受けたい、面接の練習をしたい、自分に合った職種について相談に乗ってもらいたい、といった個々の希望に対応して支援やサービスをおこなうことが、学生と職員との接点になる。また図書館では、図書の貸出・返却やレファレンスサービス、他館との相互利用の際に学生は職員と関わりをもつ。これらは両部署の全業務の中のごく一部にすぎないが、学生にとっては自分の目的に対応してもらい、期待通りの支援やサービスを受けることができたという実感が得られ、そのことが満足度を高めていると考えられる。

職員への評価の中で、「学生系の職員」への満足度が低い要因は、ひとつには上述したことの裏返しといえよう。学生系は大学行事や式典、クラブ活動、休学などの学籍異動、奨学金など、学生生活全般を業務内容とし、学生は呼び出しを受けて注意されたり、書類の提出を求められたりすることで職員と関わりをもつ機会も多くなる。クラブの予算申請の金額が認められないこともあるというように、必ずしも期待通りの対応が返ってくるわけではない。このような業務内容の性質が学生からみた学生系職員への印象をネガティブなものにしていると考えられる。しかし、キャリアサポートセンターなどの他部署にしても、学生の要望をただ受け入れるのみの対応をしているわけではない。各部署の学生への対応方法の工夫を情報交換しあうなどして、学生にとって耳の痛いことであってもきちんと伝えながら、職員との関わりでの満足度を高める努力を継続しなければならない。たった1回の利用時にたまたま対応した職員の印象が、その部署全体の印象を左右しかねない難しさがあることを、各職員は念頭に置いておく必要がある。もっともこれは職員に限らず、全教職員が意識すべきことでもある。

なお、振り返りシートで本学職員への感謝の気持ちを述べる学生は多い。その中には学生系に対する感謝の言葉も含まれていることを付言しておきたい。

友人・教員・職員との関わりでの満足度と大学生活の積極的取り組み度との関連は、表7に示したように、主に学修活動との間で相関がみられた。学修活動への積極的取り組みは、友人・教員・職員との関わり全般の満足度を高めている。

表7 人間関係の満足度と各活動の取り組み度得点との相関

	学修活動 得点	課外活動 得点	進路選択 活動得点
友人	0.195*	0.043	0.084
上級生	0.198*	0.241**	0.093
同級生	0.245**	0.117	0.176*
下級生	0.270**	0.276**	0.175*
他大学の学生	0.152	0.198**	0.159*
アドバイザー教員・ゼミ担当教員	0.342**	0.153*	0.034
所属する学科の教員	0.358**	0.130	0.097
所属する学科以外の教員	0.266**	0.216**	0.143
入試広報部の職員	0.364**	0.178*	0.074
教務系の職員	0.347**	0.129	0.115
学生系の職員	0.234**	0.057	0.041
キャリアサポートセンターの職員	0.192*	0.148*	0.240**
図書館の職員	0.382**	0.093	0.035

* p<.05 ** p<.01

友人等との関わりにおいては、学修活動に積極的に取り組んだ学生は、同級生・下級生との関係にも満足する傾向がある。授業で下級生のお世話をしたり、ゼミの後輩の前で研究発表をするなどの経験が、「縦」の関係をつくり出すのかもしれない。また、アルバイトやクラブ活動などの課外活動に積極的に取り組むことで、上級生や下級生、他大学の学生との「横」の関係も構築される。多様な活動への参加と積極的取り組みは、大学生活を充実したものにすると同時に、人間関係にも深みをもたらすといえるだろう。

進路選択活動に積極的に取り組んだ学生は、キャリアサポートセンターの職員に対する満足度が高い。センターに自発的に足を運び、職員とのコミュニケーションを重ねる中で、相互の信頼関係が形成されたことが満足感につながったものと考えられる。

(4) 大学生活を通じて身につけた力

本学で4年間を過ごすことで、卒業生たちはどのような力が身についたと感じているのだろうか。大学の授業を通じて身につけることができるのは、専門的な知識や技能だけではない。自分の意見を相手にわかりやすく伝え、相手の意見に耳を傾ける力、批判的に考え情報を吟味する態度、他者とともに作業する協調性など、講義科目や演習、実習では、さまざまな力が要求される。さらに、授業だけが学びの場ではない。ノートルダム清心女子大学が培ってきた文化、守ってきた価値が、学生を育み、その能力を開花させるということもあるだろう。他大学ではなく、本学で学んだからこそ身につけることができる力とはどのようなものであろうか。

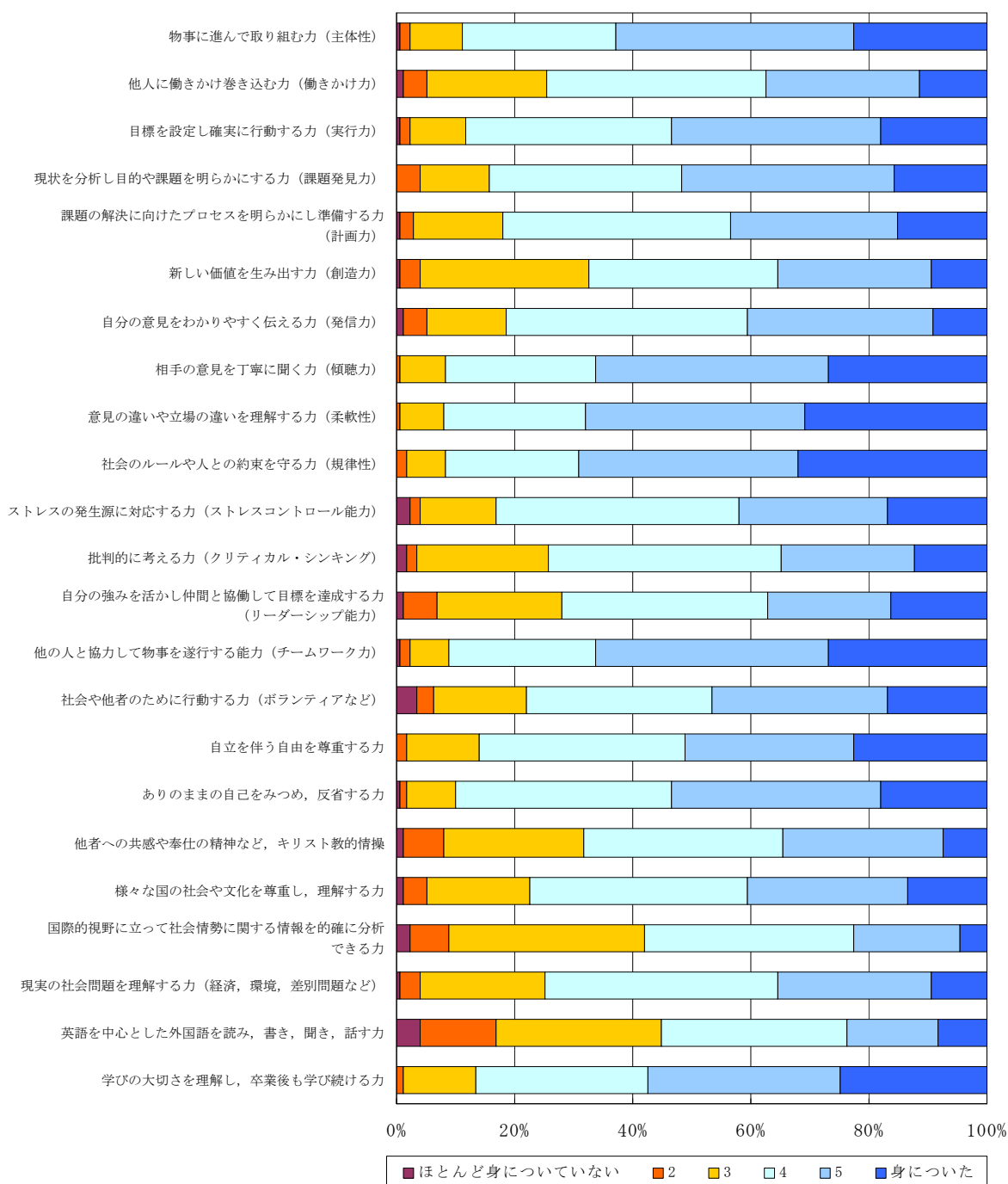
大学生活を通じて23項目の「力」がそれぞれどの程度身についたと考えるかを尋ねた回答の結果が、図8である。「社会人基礎力²⁾」の12項目を中心に、キリスト教的情操や自己受容と内省、国際性など、本学の独自性を示すと考えられる項目を加えて23項目とした。いずれも「ほとんど身につけていない」(1点)から「身についた」(6点)までの6件法で回答を求めている。

図8を全体的に見渡すと、多くの項目で「身についた」という実感があることがわかる。回答が「6点」の比率が高い順に「社会のルールや人との約束を守る力(規律性)」「意見の違いや立場の違いを理解する力(柔軟性)」「相手の意見を丁寧に聞く力(傾聴力)」「他の人と協力して物事を遂行する能力(チームワーク力)」「学びの大切さを理解し、卒業後も学び続ける力」「物事に進んで取り組む力(主体性)」「自立を伴う自由を尊重する力」の項目が並ぶ。社会のルールを守り、他者を理解・尊重し、他者と協同する力を本学で身につけることができたと思える学生が多いといえる。

逆に「6点」の比率が低い項目は、低い順に「国際的視野に立って社会情勢に関する情報を的確に分析できる力」「他者への共感や奉仕の精神など、キリスト教的情操」「英語を中心とした外国語を読み、書き、聞き、話す力」「自分の意見をわかりやすく伝える力(発信力)」「現実の社会問題を理解する力(経済、環境、差別問題など)」などとなっている。本学ならではの身につく力として期待した国際的視野、キリスト教的情操、英語力等は、残念ながら、学生の実感としては能力を向上させることができていない。

2) 経済産業省が提唱する概念であり、読み書きを含む基礎学力、職業知識や資格などの専門知識に加えて、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要となる第3の能力として社会人基礎力が定義された。「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つを核とし、12の能力要素で構成されている。

図8 大学生活を通じて身につけた力



もとより、これらの力はいずれも、何かの基準によって測定することが難しく、定義が曖昧なものである。学生たちが力が身についたかどうかを自分自身で判断するときも、主観的な感覚に頼らざるをえない。それでも「大学生活の4年間で成長できた」という感触を得ることは、卒業後の生活の中で大きな自信となるはずである。23の項目間で到達度にばらつきはあったが、多くの学生が自己のたしかな成長を感じていることは、本学で学び、本学で大学生活を送ることの意義として評価することができよう。しかし同時に、あまり「身についた」実感がない項目があることも事実として受け止めなければならない。図8の結果は、総合力としての本学教育の強みと弱みを知るための指標としても活用すべきなのかもしれない。

これらの力の向上が、学修・課外・進路選択活動への積極的取り組み度と関連していることはいうまでもない。表8に示される通り、学修活動得点は23項目すべてと有意に相関している。すなわち、本学のさまざまな講義や演習、実習、卒業論文や免許・資格の取得等に積極的に取り組んだ学生ほど、「身につけた力」をより強く実感しているということである。また学修活動だけでなく、課外活動や進路選択活動への取り組みも、多様な力の向上に関連しているといえる。

表8 大学生活を通じて身につけた力と各活動の取り組み度得点との相関

	学修活動 得点	課外活動 得点	進路選択 活動得点
物事に進んで取り組む力（主体性）	0.479**	0.301**	0.229**
他人に働きかけ巻き込む力（働きかけ力）	0.341**	0.314**	0.171*
目標を設定し確実に行動する力（実行力）	0.437**	0.269**	0.290**
現状を分析し目的や課題を明らかにする力（課題発見力）	0.416**	0.205**	0.215**
課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力（計画力）	0.419**	0.234**	0.311**
新しい価値を生み出す力（創造力）	0.329**	0.204**	0.125
自分の意見をわかりやすく伝える力（発信力）	0.303**	0.147	0.177*
相手の意見を丁寧に聞く力（傾聴力）	0.305**	0.235**	0.184*
意見の違いや立場の違いを理解する力（柔軟性）	0.256**	0.186*	0.193*
社会のルールや人との約束を守る力（規律性）	0.329**	0.239**	0.216**
ストレスの発生源に対応する力（ストレスコントロール能力）	0.280**	0.213**	0.142
批判的に考える力（クリティカル・シンキング）	0.276**	0.195**	0.124
自分の強みを活かし仲間と協働して目標を達成する力（リーダーシップ能力）	0.409**	0.377**	0.214**
他の人と協力して物事を遂行する能力（チームワーク力）	0.281**	0.236**	0.212**
社会や他者のために行動する力（ボランティアなど）	0.318**	0.408**	0.168*
自立を伴う自由を尊重する力	0.421**	0.327**	0.233**
ありのままの自己をみつめ、反省する力	0.386**	0.232**	0.159*
他者への共感や奉仕の精神など、キリスト教的情操	0.439**	0.239**	0.171*
様々な国の社会や文化を尊重し、理解する力	0.419**	0.113	0.169*
国際的視野に立って社会情勢に関する情報を的確に分析できる力	0.418**	0.174*	0.288**
現実の社会問題を理解する力（経済、環境、差別問題など）	0.451**	0.213**	0.305**
英語を中心とした外国語を読み、書き、聞き、話す力	0.289**	0.182*	0.176*
学びの大切さを理解し、卒業後も学び続ける力	0.432**	0.315**	0.186*

* p<.05 ** p<.01

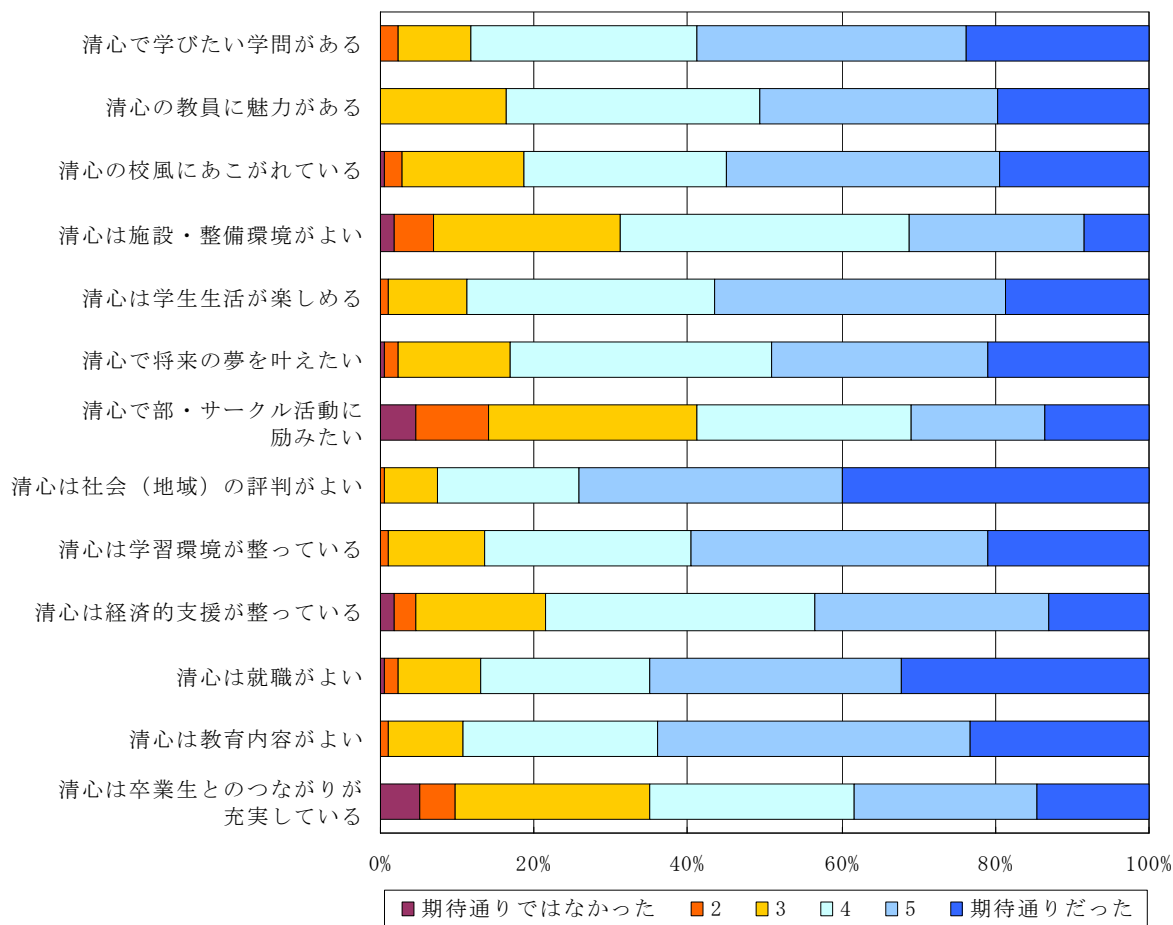
(5) 入学前に抱いていた期待の充足度

入学前に抱いていた本学に対する期待は、4年間の大学生活を経て、大きく変化するものなのだろうか。期待に胸を膨らませて「あれもしたい」「これにもチャレンジしたい」と入学してきたときの思いは、期待通りだったのか、それともイメージしていたものとは異なっていたのか。図9は13の項目について回答された結果である。回答の選択肢は「期待通りではなかった」（1点）から「期待通りだった」（6点）までの6件法である。

全体的に「期待通り」との回答が多数を占める結果となっている。ただし項目間にはばらつきがみられた。最も期待の充足度が高いのは「清心は社会（地域）の評判がよい」である。清心の学生になって周囲から評価される経験をしたり、社会の評判を意識するようになったりすることで、期待通りというより期待以上と感じた学生もいるのではないだろうか。本学のブランドイメージが地域に浸透していることをうかがわせる結果である。以下、「6点」の回答の比率が高い順に、

「清心は就職がよい」「清心で学びたい学問がある」「清心は教育内容がよい」「清心で将来の夢を叶えたい」「清心は学習環境が整っている」「清心の教員に魅力がある」「清心の校風にあこがれている」「清心は学生生活が楽しめる」の項目が続く。ここまでは「4点」以上の「期待通り」であったとする回答が全体の8割を超えており、これらの項目は期待を裏切らなかったといえる。学びの内容や学ぶための環境、学んだ後の進路に関する期待に本学は応えることができているといえよう。

図9 本学の学生生活は入学時の期待通りだったか



評価がやや落ちるのは「清心は施設・設備環境がよい」「清心は経済的支援が整っている」「清心で部・サークル活動に励みたい」「清心は卒業生とのつながりが充実している」の4項目である。施設・環境については、図4で示した各種施設・設備の満足度と比べてやや厳しい評価であるように思われるが、個別の施設・設備ではなく、ここでの回答は本学の施設や環境全体に対する期待と、それに対する総合的評価として受け止めるべきなのであろう。評価が厳しいのは、入学時の期待が大きかったことの裏返しといえるのかもしれない。経済的支援の期待充足度は、図4の経済的支援体制の満足度とおおむね一致し、2割強の者が本学の経済的支援を不十分であるととらえていることになる。本学の新しい奨学金制度はスタートしたばかりであり、その周知徹底も含めて、社会情勢を踏まえつつ学生側のニーズを把握していく取り組みを続ける必要があるだろう。卒業生とのつながりと部・サークル活動の2つは「期待通りではなかった」とする回答が最

も多い項目である。入学前のイメージと入学後の実態が大きく乖離した項目として、学生が具体的に何を望んでいるのかを丁寧に聴き取る作業が必要である。

入学時の期待と本学の学生生活が合致した「期待通り」の項目が、学びの内容や環境など、学修活動と大きく関連していることから予想されるように、期待の充足度は学修活動の取り組みの積極度と相関している（表9）。学修活動得点はほとんどの項目と高い相関を示しており、勉学に積極的に取り組むことが本学の学生生活全般の充足度をも高め、それが高い満足感をもたらしていると考えられる。課外活動への取り組みも本学での大学生活が「期待通りだった」と思わせることに寄与している。自分が熱心に取り組んできたことに対しても、その取り組みの場である大学に対しても、肯定したいという思いが、期待の充足感や大学への満足感を高めているものと思われる。

表9 入学前に抱いていた期待の充足度と各活動の取り組み度得点との相関

	学修活動 得点	課外活動 得点	進路選択 活動得点
清心女子大学で学びたい学問がある	0.403**	0.197**	0.049
清心女子大学の教員に魅力がある	0.422**	0.176*	0.056
清心女子大学の校風にあこがれている	0.353**	0.130	0.018
清心女子大学は施設・整備環境がよい	0.342**	0.245**	0.148
清心女子大学は学生生活が楽しめる	0.226**	0.129	0.129
清心女子大学で将来の夢を叶えたい	0.278**	0.149*	0.052
清心女子大学で部・サークル活動に励みたい	0.193*	0.374**	0.184*
清心女子大学は社会（地域）の評判がよい	0.372**	0.291**	0.117
清心女子大学は学習環境が整っている	0.421**	0.182*	0.144
清心女子大学は経済的支援が整っている	0.278**	0.151*	0.112
清心女子大学は就職がよい	0.314**	0.230**	0.098
清心女子大学は教育内容がよい	0.456**	0.157*	0.024
清心女子大学は卒業生とのつながりが充実している	0.213**	0.241**	-0.073

* p<.05 ** p<.01

表10 本学入学時の志望順位別にみた入学時の期待の充足度

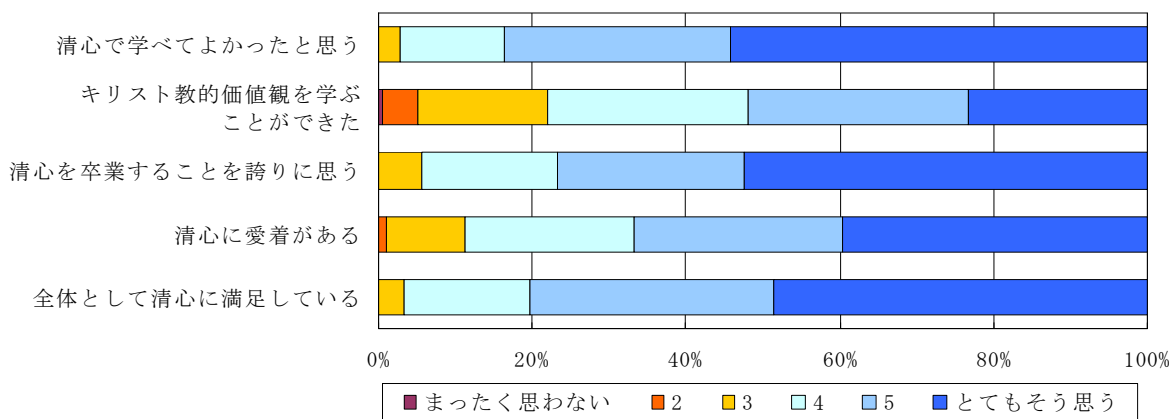
	第一志望		第二志望		第三志望以下		全体		有意 確率
	平均	度数	平均	度数	平均	度数	平均	度数	
清心女子大学で学びたい学問がある	4.90	(103)	4.44	(55)	4.22	(18)	4.69	(176)	0.002
清心女子大学の教員に魅力がある	4.66	(103)	4.22	(55)	4.89	(19)	4.55	(177)	0.006
清心女子大学の校風にあこがれている	4.80	(102)	4.27	(55)	3.83	(18)	4.54	(175)	0.000
清心女子大学は施設・整備環境がよい	4.15	(103)	3.72	(54)	4.06	(18)	4.01	(175)	0.065
清心女子大学は学生生活が楽しめる	4.75	(103)	4.40	(55)	4.56	(18)	4.62	(176)	0.080
清心女子大学で将来の夢を叶えたい	4.52	(103)	4.42	(55)	4.72	(18)	4.51	(176)	0.567
清心女子大学で部・サークル活動に励みたい	3.96	(103)	3.65	(55)	3.83	(18)	3.85	(176)	0.388
清心女子大学は社会（地域）の評判がよい	5.17	(103)	4.84	(55)	5.05	(19)	5.06	(177)	0.103
清心女子大学は学習環境が整っている	4.80	(102)	4.44	(55)	4.44	(18)	4.65	(175)	0.051
清心女子大学は経済的支援が整っている	4.47	(103)	4.13	(55)	3.94	(18)	4.31	(176)	0.049
清心女子大学は就職がよい	4.88	(102)	4.73	(55)	4.79	(19)	4.82	(176)	0.689
清心女子大学は教育内容がよい	4.91	(103)	4.56	(55)	4.50	(18)	4.76	(176)	0.041
清心女子大学は卒業生とのつながりが充実している	4.20	(103)	3.75	(55)	4.11	(18)	4.05	(176)	0.104

これら 13 項目の期待の充足度を、本学入学時の志望順位別に比較したのが表 10 である。多くの項目で、第一志望で入学した学生たちの「期待通りだった」という意識が感じられる結果となっている。第三志望以下では「学びたい学問」「校風へのあこがれ」の期待が低く、入学当初は勉学への動機づけに苦労した学生もいたのであろう。しかし第三志望以下は「教員の魅力」に関しては期待通りであったととらえており、彼女たちにとっては授業をおもしろく感じられることが学修活動に積極的に取り組むことができた一因となったのかもしれない。

(6) 本学で学んだことへの評価

本学での学修活動・課外活動・進路選択における活動への取り組みの程度や、キャンパスの環境や各種支援、人間関係の満足度、大学生活を通じて身につけた力など、学生生活の過ごし方や成果はさまざまであるが、これらの総合評価としての本学に対する思いとはどのようなものなのだろうか。図 10 に示したのは、本学および本学で学んだことへの評価の回答である。「まったく思わない」(0 点) から「とてもそう思う」(6 点) までの 6 件法で回答されている。

図 10 本学で学んだことへの評価



本調査の回答が、卒業証書・学位記授与日の当日あるいはそれ以降になされていること、また低い回収率の中で回答を寄せてくれた学生たちの多くは本学に好意的であると考えられることから、本学に対する満足度や評価が高く出ることは予想できた。実際に「清心で学べてよかったと思う」「清心を卒業することを誇りに思う」「全体として清心に満足している」の上位 3 項目は、「2 点」以下の回答は 0 であり、全体の 9 割以上が肯定的な回答をしている。「清心に愛着がある」も 88.7% が「そう思う」という肯定的回答である。

「キリスト教的価値観を学ぶことができた」の肯定的回答は 78.4% であり、これでも十分に高い値といえるが、他の 4 項目に比べると低い。図 1 でみた通り、学修活動への取り組みの中でキリスト教科目への積極度は低いものであり、図 8 においても、キリスト教的情操が身についたとはあまり実感されていなかった。しかし、この結果を深刻に憂う必要はないのかもしれない。日常生活の中で信仰をもたぬ者がキリスト教的価値観について思いを巡らすことはほとんどなく、キリスト教教育の効果は自覚しにくいものだからである。それでも、ある学生が振り返りシートに綴った記述には、キリスト教的価値観が根付いていることがうかがえる。「新たな学問としての興味・関心だけでなく、行事や授業で聞いた聖書や福音書の表現や一節が勉学や学生生活を前向

きに捉える道標となり、不本意入学を乗り越えて4年間を過ごすことができた」とその学生は記している。つらいとき、壁にぶつかったときにこそ、キリスト教的価値観は思い出されるのかもしれない。学生たちの卒業後の長い人生の中で、本学での学びが大きな助けとなる日が訪れることもあるだろう。「キリスト教的価値観を学ぶことができた」ことの真の意義は、学生自身もわれわれも、長い目で評価しなければならぬように思われる。

本学で学んだことへの評価も、当然ながら学修活動への積極的取り組み度と相関している（表11）。勉学に熱心に取り組んだ学生ほど、清心で学んだことを肯定的に評価する傾向にある。課外活動への取り組みも、本学の肯定的評価と相関している。

表 11 本学で学んだことへの評価と各活動の取り組み度得点との相関

	学修活動 得点	課外活動 得点	進路選択 活動得点
清心で学べてよかったと思う	0.397**	0.177*	0.069
キリスト教的価値観を学ぶことができた	0.391**	0.247**	0.094
清心を卒業することを誇りに思う	0.428**	0.241**	0.094
清心に満足している愛着がある	0.368**	0.106	0.076
全体としてノートルダム清心女子大学に満足している	0.373**	0.165*	0.024

* p<.05 ** p<.01

なお、表12は5項目の得点を本学の志望順位別に比較したものである。清心で学べてよかったという気持ちや、誇りや愛着、全体的な満足度は、入学時の期待を裏切られることがなかった第一志望で入学した学生が最も強く感じているといえる。

表 12 本学入学時の志望順位別にみた本学で学んだことへの評価

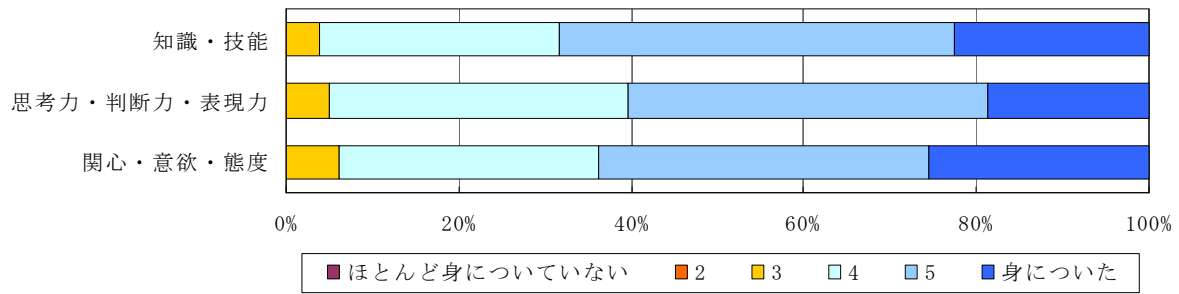
	第一志望		第二志望		第三志望以下		全体		有意 確率
	平均	度数	平均	度数	平均	度数	平均	度数	
清心で学べてよかったと思う	5.48	(103)	5.13	(55)	5.28	(18)	5.35	(176)	0.036
キリスト教的価値観を学ぶことができた	4.50	(103)	4.38	(55)	4.61	(18)	4.47	(176)	0.741
清心を卒業することを誇りに思う	5.45	(103)	4.93	(55)	4.94	(18)	5.23	(176)	0.001
清心に愛着がある	5.11	(103)	4.65	(55)	4.89	(18)	4.94	(176)	0.037
全体としてノートルダム清心女子大学に満足している	5.42	(103)	5.04	(55)	5.06	(18)	5.26	(176)	0.014

(7) ディプロマ・ポリシーの到達度

卒業時に身につけてほしい能力として提示されているディプロマ・ポリシーは、学生たちの到達目標であり、自身の現在地を知る手がかりともいえる。ディプロマ・ポリシーは学科ごとに設定されており、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「関心・意欲・態度³⁾」の3つの領域で構成される。ディプロマ・ポリシーに示される能力が、入学時と比較して、卒業を臨む現在ではどの程度身についたと思うかを回答してもらった結果が図11である。「入学時と変わらない」(0点)から「身についた」(6点)までの6段階で回答されている。

3) 現在は「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に変更されている。

図 11 3つのディプロマ・ポリシーの到達度



3つの領域間に回答の差はみられず、いずれにおいても入学時に比べて「身についた」と能力の向上を感じていることがうかがえる。また、ディプロマ・ポリシーの到達は大学での学び全体の成果であり、大学生活での諸活動の取り組み度と関連する。表 13 からは、学修活動への積極的取り組みを中心に、課外活動および進路選択活動も含めて、学生生活全体に積極的に取り組むことがディプロマ・ポリシーの到達度に大きく影響することがわかる。

表 13 ディプロマ・ポリシーの到達度と各活動の取り組み度得点との相関

	学修活動 得点	課外活動 得点	進路選択 活動得点
知識・技能	0.389**	0.235**	0.194*
思考力・判断力・表現力	0.337**	0.168*	0.156*
関心・意欲・態度	0.392**	0.254**	0.194*

* p<.05 ** p<.01

なお表 14 は、入学時の志望順位別にみたディプロマ・ポリシーの到達度の比較である。3つの領域とも志望順位別の平均値に有意な差はみられないが、より「身についた」と感じているのは第二志望、第三志望以下で入学した学生のほうである。入学時は不本意であっても、腐らずに勉学等に意欲的に取り組むことによって、各学科が要求する能力を着実に身につけて卒業してゆくのである。

表 14 本学入学時の志望順位別にみた3つのディプロマ・ポリシー到達度

	第一志望	第二志望	第三志望以下	全体	有意 確率
	平均 度数	平均 度数	平均 度数	平均 度数	
知識・技能	4.82 (102)	4.95 (55)	4.95 (19)	4.88 (176)	0.611
思考力・判断力・表現力	4.69 (102)	4.76 (55)	4.89 (19)	4.73 (176)	0.563
関心・意欲・態度	4.81 (102)	4.82 (55)	5.00 (19)	4.84 (176)	0.692

ただし、ここで取り上げているディプロマ・ポリシーの到達度とは、あくまでも回答者が主観的に評価した自身の能力であり、入学時と比較した成長の度合いである。客観的な測定値ではないことに留意すべきであろう。表 15 は、本学における通算GPAおよび出身高等学校評定値と3つのディプロマ・ポリシーの到達度との相関係数を示したものである。表 13 でみられたように、ディプロマ・ポリシーと各活動の積極的取り組み度がともに主観的評価であるときは、相互の相関は高いものになるが、表 15 のGPAや評定値のように客観的評価とされる値との相関は低い。

表 15 通算GPA, 出身高等学校評定値とディプロマ・ポリシー到達度との関連

	ディプロマ・ポリシー		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	関心・意欲・態度
通算GPA	0.175*	0.167*	0.167*
出身高等学校評定値	0.072	0.146	0.080

* p<.05 ** p<.01

今後は、ディプロマ・ポリシーの到達度を客観的に測定する尺度も必要となろう。しかし、今回のような主観的評価によるディプロマ・ポリシーの到達度を尋ねることもやはり必要であると思われる。学生自身が「力が身についた」「成長できた」と実感し、自信を得て卒業していくかどうかという点も、本学の学びを評価するうえで大切にしなければならないと考えるからである。

では最後に、主観的評価間の関連として、学修活動への積極的取り組み度、大学生活を通じて身につけた力と、3つのディプロマ・ポリシーとの相関係数を表16および表17でみておくことにしよう。

表16からは、ディプロマ・ポリシーの主観的到達度を形成するのは、学科専門科目だけでなく全学共通科目や免許・資格関連科目を含む大学での学業全体への取り組みであることがわかる。もちろん、その中核をなすのは卒業論文、ゼミの演習や個別指導、学科専門科目である。しかし、キリスト教科目や教養科目、自立力育成科目に積極的に取り組んだという自己評価も、自身の学問的成長を感じる要素となっている。大学での学びの一つひとつが、集大成としてのディプロマ・ポリシーに収斂するような感覚を、積極度の高い学生たちはもっているのかもしれない。

表 16 学修活動への積極的取り組み度とディプロマ・ポリシー到達度との関連

	ディプロマ・ポリシー		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	関心・意欲・態度
キリスト教科目	0.222**	0.175*	0.173*
教養科目	0.269**	0.283**	0.218**
自立力育成科目	0.209**	0.204**	0.237**
外国語科目	0.031	0.096	0.115
講義形式の学科専門科目	0.390**	0.328**	0.327**
ゼミ形式の学科専門科目や教員の個別研究指導	0.214**	0.197**	0.320**
卒業論文	0.301**	0.239**	0.370**
免許・資格関連科目	0.185*	0.049	0.122
海外留学	0.111	0.110	0.142

* p<.05 ** p<.01

また表17は、大学生活を通じて身につけた力と3つのディプロマ・ポリシーとの相関係数を示している。社会人基礎力をはじめとする多様な力が、ディプロマ・ポリシーの主観的到達度と関連している。これらの24項目の力も3つのディプロマ・ポリシーも、大学生活の中で身につけた力であると回答者には意識されており、項目間で相互に相関が高いのは当然ともいえる。

今回の調査では、卒業生たちの自己および本学への評価は総じて高いものであった。自分自身の評価はいかようにもでき、主観的評価は自己満足にすぎないといわれればそれまでである。し

かしながら、これらの高い自己評価は、諸活動に積極的に取り組んだ自分自身への揺るぎない信頼と、その努力が自分を成長させたという実感に裏付けられている。惜しみなく努力を重ねた自分を信頼できるからこそ、自分の成長を肯定し、自分の成長の場である大学を肯定することができる。主観的評価としての積極的取り組み度・満足度・到達度は、回答者の内面でこのように結びついているのではないだろうか。

表 17 大学生活を通じて身につけた力とディプロマ・ポリシー到達度との関連

	ディプロマ・ポリシー		
	知識・技能	思考力・判断力・表現力	関心・意欲・態度
物事に進んで取り組む力（主体性）	0.451**	0.426**	0.450**
他人に働きかけ巻き込む力（働きかけ力）	0.289**	0.225**	0.349**
目標を設定し確実に行動する力（実行力）	0.393**	0.323**	0.437**
現状を分析し目的や課題を明らかにする力（課題発見力）	0.401**	0.374**	0.513**
課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力（計画力）	0.388**	0.420**	0.478**
新しい価値を生み出す力（創造力）	0.366**	0.372**	0.356**
自分の意見をわかりやすく伝える力（発信力）	0.355**	0.346**	0.323**
相手の意見を丁寧に聞く力（傾聴力）	0.388**	0.317**	0.353**
意見の違いや立場の違いを理解する力（柔軟性）	0.380**	0.407**	0.396**
社会のルールや人との約束を守る力（規律性）	0.372**	0.295**	0.388**
ストレスの発生源に対応する力（ストレスコントロール能力）	0.138	0.151*	0.253**
批判的に考える力（クリティカル・シンキング）	0.262**	0.307**	0.313**
自分の強みを活かし仲間と協働して目標を達成する力（リーダーシップ能力）	0.318**	0.312**	0.362**
他の人と協力して物事を遂行する能力（チームワーク力）	0.329**	0.217**	0.350**
社会や他者のために行動する力（ボランティアなど）	0.232**	0.139	0.240**
自立を伴う自由を尊重する力	0.381**	0.364**	0.342**
ありのままの自己をみつめ、反省する力	0.307**	0.319**	0.389**
他者への共感や奉仕の精神など、キリスト教的情操	0.282**	0.228**	0.335**
様々な国の社会や文化を尊重し、理解する力	0.290**	0.353**	0.387**
国際的視野に立って社会情勢に関する情報を的確に分析できる力	0.268**	0.309**	0.337**
現実の社会問題を理解する力（経済、環境、差別問題など）	0.297**	0.314**	0.354**
英語を中心とした外国語を読み、書き、聞き、話す力	0.268**	0.259**	0.315**
学びの大切さを理解し、卒業後も学び続ける力	0.461**	0.394**	0.527**

* p<.05 ** p<.01

10. まとめと提言

2019年度卒業生アンケートの分析から得られた知見は、次の5点にまとめることができる。

(1) 卒業生の回答は総じて、本学や本学での学生生活に対して肯定的な評価をするものであった。他者との関わりや施設・支援の項目の一部で満足度が低い水準にとどまるものがあつたものの、本学および本学で過ごした大学生活を好意的にとらえ、高い満足度を示している。

(2) 学修活動・課外活動・進路選択における活動など、さまざまな活動に積極的に取り組んだと回答する学生が多い。これらの活動への取り組みや、大学生活全体を通して、卒業生たちは自身が成長できたという実感を得ていることがうかがえた。

(3) 多様な他者との人間関係を築くことは、充実した大学生活の基盤となりうる。また、学内外での諸活動に積極的に取り組むことは、人間関係の幅と奥行きを広げることにつながる。

(4) 入学時の志望順位が低いことは、本学においては、諸活動への取り組みの積極度や学業の到達度の妨げとはなっていない。おそらく入学後の早い段階でケアがなされ、不本意入学の学生であっても学習への動機と意欲を持つことによって、第一志望で入学した学生と同等またはそれ以上の成果を上げることができる。ただし、本学への愛着や誇り等の意識は、第一志望の学生と比べて相対的に低い。

(5) キリスト教科目への取り組み、キリスト教的情操や価値観の醸成など、本学独自の教育と思われる部分の学生への浸透が浅いようにも見受けられた。しかし、キリスト教科目を学科専門科目や資格・免許関連科目等と同列に扱うことは早計であり、さらに掘り下げた調査をおこない、長期的な視野で教育の効果をとらえる必要がある。

今回の調査は、コロナ禍による特殊な事情も要因となり、極めて低い回収率となった。卒業証書・学位記授与日当日の慌ただしい中でアンケートに記入し回収箱に投函してくださった方々、また、郵送の手間を惜しまず回答をお寄せくださった皆様には、心から感謝を申し上げたい。今回の調査結果が概して肯定的であったのは、本学で充実した4年間を送り、満足感や愛着をもつ方々が多くご協力くださったことが背景にあると考えられる。したがって、われわれはこの結果に慢心することなく、回答しなかった人も含めて卒業生全員の思いを汲み取るよう努めなければならない。

諸活動に積極的に取り組んだ学生たちの分析から改めて明らかになったのは、本学に期待され、本学における学生生活の根幹をなすのは、授業を中心とする学修活動であるということである。学生たちの学修活動への取り組みが、学びの成果のみならず、人間関係の充実や本学への満足度や愛着にもつながっていることを忘れるべきではない。学生たち一人ひとりが意欲をもって取り組むことができる教育を提供すること、そのための環境・支援を整備することを、本学はこれまでめざしてきたし、これからの歩みの前提ともなるであろう。

今回は、改訂した調査票での初めての調査であった。満足度以外の領域にも調査の幅を広げたことにより、大学として取り組むべき課題が、具体的な形でみえるようになった。学生の評価が相対的に低かった部分については、関連部署がより詳細に実態を明らかにしたうえで、課題に取り組んでいく必要がある。また、新しい調査票の質問項目や質問形式の不備な点も明らかになった。しばらくは調査項目の選定等の試行錯誤が続くであろうが、次年度調査に向けての調査票の練り直しはすぐにでも着手しなければならない課題である。

卒業生アンケートも第3回目を終えたが、在学生や卒業生の意識や実態を把握する試みはスタートしたばかりである。現在はまだ基礎的なデータを収集している段階にあり、本学が取り組むべき多方面にわたる課題にダイレクトに向き合った調査を実施するためにも、本学のおかれた現状の分析に時間を費やす必要がある。また、今後はIRセンターが実施する調査も、教学的なものへと軸足を移していくことになるであろう。単年度での分析にとどまらず、入学時、在学中のデータとリンクさせた分析をするためのデータ収集とデータベースの構築も、IRセンターの課題となる。